

パリ・エコール ノルマル音楽院教授のギブラ カツァラヴァ先生のマスタークラスが 11 月 8 日に開講されました。カツァラヴァ先生は 4 年前のレクチャーコンサート、2 年前のマスタークラスに引き続き今回は 3 回目の来校となります。

現在はフランスにいらっしゃいますが、ジョージアご出身でロシアで学ばれた先生の最も得意とするレパートリーであるロシアの作品を中心に、学部生 3 名、院生 3 名が受講しました。

先生のレッスンを 1 日聴講して最も強く感じたことはロシアの作品や人々の持つ圧倒的なエネルギーです。

ラフマニノフの 2 番のソナタ。楽譜には音符が並んでいるだけですが、先生の手にかかると絶妙なルバートとダイナミクスの変化でなんとロマンティックかつドラマティックになることか。悪趣味になってはいけないがルバートは絶対に必要、またロシア人にとって *espressivo* は *dolce* だと言う言葉もとても印象的でした。

またプロコフィエフ 4 番のソナタは 6.7.8 の戦争ソナタでなくても激しい部分には怒りの要素が含まれる、ゆるやかな部分はバレエ音楽であるなど、イメージを拓ける具体的な例をたくさん挙げてくださり、ムソルグスキーの展覧会の絵でも例えば「小人」の感情までも一つの提案ですがと前置きして説明くださるなど、受講生のみなさんにもただ指を動かすだけでない楽曲に対するアプローチの仕方を学ぶよい機会になった事と思います。

もちろん表現したい音を実際に音にするテクニックは必要であり、強音の響かせ方、手首の使い方など細やかにご指導くださいました。

曲が大きなものが多かった事もあり予定の時間をだいぶオーバーして、熱い濃密なマスタークラスは終了いたしました。



